

考える教育と生きる力 クリティカル・リーディングはなぜ必要か

三森ゆりか

一二月号で私は、クリティカル・リーディングこそ「生きる力」を育むのに最適だと書いた。この読書技術は、文学作品を題材にして開始するが、新聞記事や論説文、歴史、哲学、経済、社会学、政治など社会生活を送る上で重要な時事問題や学問も対象となる。そこでどのようなことを学ぶことができるのか文学作品を例にとつて少し具体的に説明したい。

文学作品を「クリティカル・リーディング」で取り上げるのは、作品の中に様々な人生や人間の有様が凝縮されているからである。個人が経験し認知できる範囲は限定されるが、小説の中ならありとあらゆる人生を追体験することができる。つまり、登場人物の経験や人生を通して、自分の人生について深く考える機会をもつことができるのだ。

先日私が高校生の授業で取り上げたのは、ロアルド・ダールの短編「お願い」（あなたに似た人 早川書房）である。六ページのごく短い短編で、表面的に読んだだけでは深い分析と批判的検討が始まる。少年は実はどこにでもいるのではないか。一つのこと固執して囚^{とら}われると、人は自ら認識できないままに妄執に至ることはないか。少年は犬が欲しい、という願を掛けて遊びを始めるが、人は手に入れるのが難しいものに直面すると精神の均衡を崩しやすくなるのではないか。「お願い」という題名は、どうしても犬が欲しいという願いなのか、それとも自分の思い通りにしたいという願いなのか。六ページの小説を相手に二時間もの時間をかけて討論するうちに、私も生徒たちも、実は小説の主人公の少年のような妄執に自分たち自身もいとも簡単に取り憑かれやすいということに気づく。

少年の心理状態は生きていればだれもが経験する。自分がいつその立場に置かれなくても限らない。そこに考え至ったところから、今度はそのような状態に囚われた場合、どのようにして克服すべきか、という考察が始まる。生徒たちは知恵を絞^{しぼ}り、考えを巡らして、自分自身を妄執から救う手だてを真剣に考える。人の意見を聞き、自分の考えを述べ、最善と思われる方策を探っていく。この段階に至ると、小説は人生を

ではたいした意味が隠されているとは思えない。この小説の主人公は幼い少年。彼は、はがした瘡蓋^{かさまた}が飛んでいった先の絨毯で冒險することを思いつく。赤、黒、黄色のそれぞれの模様の意味づけをし、踏んで良いのは黄色い筋の部分のみ、赤や黒の筋に足が触れたら破壊が待っていると自分で規則をつくる。少年は次第に遊びに囚われ、ついには黒い部分に飲み込まれる。明るく陽の当たる場所では、母親が坊やの行方を捜している。

「クリティカル・リーディング」を通して探り出すのは、作家ダールがこの小説で何を言おうとしたのか、テーマは何か、少年の遊びは何を象徴するのか、ということである。

生徒たちは最初に読み始めたとき、この小説は子供特有の「ごっこ遊び」がテーマだと考えた。幼い少年が主人公だからである。けれどもそれにしては、全六ページのうち一ページもの貴重な紙面を割いて瘡蓋はがしに固執する少年を作家が描写した意図が不明になるし、最後に少年が脂汗を流しながら恐怖の悲鳴を上げて黒い模様にして単なる子供の遊び話なのか。この気づきからさらに考えるきっかけを与えてくれる貴重な機会に変化する。実際に妄執に囚われてからでは、闇から抜け出すことは難しい。健全な心理状態にあるときに、小説の主人公を通して人間の心理を考察しておく機会をもつことは大変重要である。自分自身が問題に直面したとき、こうした経験は大いに役立ち、多面的に考える力、立場を変えて客観的に考える力、状況を分析して理性的に論理的に判断する力など、彼らの中から真の意味での「生きる力」を引き出すことだろう。

文学作品で扱われる題材は多岐にわたる。例えば、扱う小説がカルト的な宗教を、あるいは戦争の悲惨を題材としていたら何を学べるだろうか。家族やいじめの問題、病氣、歴史的事件や大企業の汚職問題など人間が生きていく上で遭遇する可能性のあるあらゆる現象が文学作品の中には凝縮されている。テーマの追跡と討論を通して、読者は作品に書かれた状況を内面化し、自分自身の人生と重ね合わせて考える機会をもつことだろう。このような経験の積み重ねが、実際に困難に直面したときにどれほど役に立つか、容易に想像いただけるものと思う。

（つくば言語技術教育研究所）